

ヘルスケーススタディー

手ごわいアレルギー性かぶれ ステロイド製剤で炎症を抑制

近代医療と代替医療、その他のヘルスケア、健康分野での具体的な事例に対する「症状」「診断」「治療法」「予防法」などを聞く



フーン・チャン先生
(Hoon Chung, MD)

皮膚科専門医師。東大医学部付属病院で皮膚科研修後、開業医/虎ノ門病院皮膚科にきび専門外来医として地域医療に従事。ロンドン大学で臨床皮膚科学とウイルス学修士号取得。ハーバード大学医学部皮膚科学教室リサーチフェローを経てニューヨークで診察開始。

今回のケース

腕の内側にできた赤いブツブツが顔にもでき、だんだん大きくなっており、激しい痒みが伴っていました。

病名	接触性皮膚炎(かぶれ)		
年齢	50代	性別	男性

症状

チャン先生自身の接触性皮膚炎の体験談。接触性皮膚炎とは、俗に言う「かぶれ」のことだ。先生はまず、腕の内側にできた赤い斑点に気付いた。原因に心当たりがなく、しばらく放っておいたところ、斑点が広範囲に広がり、我慢できないほど痒くなってきた。

診断

チャン先生によると、かぶれは、皮膚に触れた物質の刺激(摩擦)によって起こる。



医師が処方するステロイド外用薬の例。市販薬(OTC薬)に比べて効き目が強い。顔や外陰部以外は薬の吸収率が低いいため、強めの薬を使う。外用薬で治らない場合は、内服薬で治療する。

「二次刺激性」と、アレルギーによって生じる「アレルギー性」の2種類に大別される。一次刺激性の代表例は、オムツのゴムの部分や、ヤマイモのトゲ状の成分が皮膚に触れ、その部分がかすれてできるかぶれなど。接触した部位だけに、4、5分後に症状が現れる。

一方のアレルギー性は、症状が出るのが原因物質に触れてから24時間以降と比較的遅く、48〜72時間後にピークに達する。うるし、桜草、マンゴー、ピスタチオ、ギンナンなどが代表的な原因物質として挙げられる。アレルギー性は、原因物質の成分が血中に入って全身に回り、物質に直接触れていない部位にも症状が出ることもある。これを「血行性」と呼ぶ。

症状の程度は、一次刺激よりもアレルギー性さらに血行性の方がひどい。いずれも炎症を抑えるステロイドの外用薬か内服薬で治療する。一次刺激性の場合、医師が処方する強めの外用薬で大抵は完治する。アレルギー性は、外用薬よりも効き目の強い内服薬が必要になることがあり、血行性になると、「外用薬だけではまずダメ」で、内服薬を使用する。

チャン先生によると、かぶれの原因は、問診の結果と症状の現れ方でほぼ見当がつく。原因不明で再発を繰り返していれば、アレルギー検査を実施する。アレルギー性の場合、初めて触れた物質で症状が出ることはなく、何度も接触するうちに体がその物質を覚えると、アレルギー反応を起こすことがある。長年愛用してきた化粧品やピアスでかぶれることもある。チャン先生は指摘する。

予防

「最大の予防は、原因物質を避けること」とチャン先生。かぶれを疑ったら、勝手に薬を塗ったりせずに、速やかに受診することが大切という。(大村智子)

Information

日本クリニック
Nihon Medical Healthcare
15 W. 44th St., 10th Fl.
(bet. 5th & 6th Aves.)
TEL: 212-575-8910
www.nihonclinic.com